

M児の問題行動の軽減をめざして
～人をたたく等の行動に対して～

高 敏 裕

1. はじめに

発達障害児の問題行動について、藤原（2001）は「問題となる行動を示している本人やその行動のみを変えるだけでは十分でなく、問題となる行動を起こしやすい場面状況や、周囲の人のかわり方を変えることも必要である」と述べている。

本事例研究の対象児M児は、人をたたいたりメガネをはたき落としたりする行動が目立つ児童である。この問題行動についてその要因をさぐり、また本児にとって見通しがもてるよう環境を整え、教師とのコミュニケーションを育むことでその行動の軽減をめざす取り組みを行った。

1. 対象児

M・Y 男 小3（自閉性障害）

(1) 各種検査による実態

- ・KIDS 総合発達年齢2才 総合発達指数17.5

領域	運動	操作	理解言語	表出言語	概念	対子ども	対成人	しつけ	食事
発達年齢	2:4	3:0	2:4	1:4	0:0	1:6	1:5	3:9	1:9

- ・国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査

動作性課題 4：6～4：11、受信 1：10、発信 2：1

- ・絵画語彙発達検査（PVT） 語彙年齢（VA）3歳2ヶ月

(2) 1学期当初の様子

①コミュニケーション面

大人とのかかわりが主で、「〇〇先生、ブランコ押してください」と言って遊んでもらいたがり、大人のすることをよく見ており、自ら模倣しようとする。自分の好きな言葉を言って、それを大人に言ってもらったり、紙に書いてもらったりすることも喜ぶ。しかし、不明瞭な言葉も多く、何度も聞き返すことも多い。身近なこと（生活カード、好きな車など）の単語カードはわかり、見本の字を見て書くのは慣れてきている。好きな給食のメニューや自動車の種類は自分から紙や黒板に書いて楽しんでいる。

②行動面

予定の変更などよく気にし、その日の授業など変更がある日はけわしい顔つきの時もある。めがねや帽子に関心があり、それを身につけた人が近くにいるとはたき落とそうと向かっていく。教室では、気になる友だちの頬をたたいたり、くじったりすることがある。教師にもほほをたたいたり、腕に爪をたてたり、噛もうとすることもある。

以上のことから自立活動の個別の指導計画の目標を次のように設定した。

<長期目標>

- ・相手の指示を理解したり、人にわかりやすく自分の要求や思いを言葉で伝える。

・人をたたくななどの問題行動を軽減し、友だちや先生と好ましいかかわりができる。

<一学期の目標>

- ・自分の好きな言葉を相手にわかるよう言葉や文字で伝えることが増える。
- ・人をたたく等の問題行動を軽減し、友だちや先生との好ましいかかわりを増やす。

(3) 経過

人をたたくななどの問題行動の要因をさぐるため、下記の藤原(2001)が作成した記録用紙(図1)を用い毎日記録していくことにした。担任だけでは目の届かない場面もあるため、M児の問題行動を目にしたら用紙に記録するよう小学部の教員全員に協力をお願いした。そして、それをもとに研究グループだけでなく、部会でも話題にし、その対処について意見を交換した。

項目	先行条件		問題行動		結果		備考
	時	状況	行動の型	行動の様子	直後の結果	てんま	
内容	いつ	どのような状況で	どのような問題行動が	どのように生じているのか	どのようなことが起こったのか	どのように展開したのか	その他の行動問題に関連すること
	年齢 時期 時間	場面や活動 直前のきっかけ だれに対して	行動の型	具体的に順序立てて行動の様子程度	直後の対応 周りで起こったこと 相手の反応	その後のてんまつ 結局どうなったのか	体調 情緒の状態

図1 収集した情報を整理するための様式

行動の記録を毎日つけていくことで、以下のことがわかってきた。

1日にだいたい2, 3回たたくななどの行動があり、曜日別では月曜日(休み明け、全校集会がある)や水曜日(週1回の午後の授業、課外活動でトランポリンがある)に多く、多い日は5, 6回、短時間の間に何回も手が出る日も見られた。その他、運動会の練習が続き予定の変更が多い時や嫌な検診があった後などもたたくな行動が目立った。たたくな理由がわかることはあるが、理由がわからないことの方が多かった。

児童生徒では、たたくと泣いたり大きな反応をしたりする子をねらうことがあり、パニックなどで騒いだ子を時間がたってから(例えば学習の終わり頃、片づけなどで手薄になった頃など)たたきに行ったりすることも見られた。たたくな児童を決めているようであるが、たまたまそこにいた児童をたたくこともあった。

教師に対しては、M児の隣のイスに座った教師が都合により離れ代わりに教師が隣に座った時に手が出たり、遊びの時間など本児とめいっぱいかかわって遊んでもらった教師をたたきにいくことが見られた。まためがねの教師や保護者が近くに来るとはたき落とそうと手が出ることも多かった。

以上のことを踏まえて日頃の様子から、M児が児童生徒にたたきにいかないよう教師がそばにつくようにしたり、準備や後かたづけの手伝いを促したりして空白の時間を作らないよう気をつけた。全校集会のことは職員会などで他学部の先生にも気をつけてほしい旨を伝えた。行事など予定の変更がある場合は前日の終わりの会や当日の朝の会で伝えるようにした。また、M児が「～してください」と言って来た場合はなるべく受け入れるようにし、好きな遊びを一緒に行うことで、よりよいかかわりが育めるよう配慮した。

夏休み中に研究グループ内での話し合いの中で、たたくな理由がわからないことについて、本児のいる学校内の環境がまだ混沌としており、本児にとってもっとわかりやすく整えることが必要なのは、と意見が出た。その中で学校生活に見通しをもてるよう、本児用の日程黒板を作成したり、M児が好きそうな写真カードなどたくさん準備してはどうか、といった意見もあった。それをもとに、2学期の目標を以下のように定めた。

どで「よ～いドン」と声を掛け追いかけてごっこを楽しむ姿も多く見られている。

10月下旬から表現会の練習で、特別時間割が約3週間ほどあったが、予定黑板や宿題のプリントで事前に知らせたり、劇の中で釘打ちなど好きな活動もあつたりしたからか、運動会の練習時のようにけわしい顔はあまりみられなかった。

2学期の夏休み明けの時期は問題行動が目立ったが、10月～12月にかけて校内では1日に1回程度と回数としては減ってきて、その分落ち着いて学習に取り組んでいる場面が増えたようである。また、朝からけわしい顔つきの時は登校時のスクールバス内で騒いでいた児童がいて、それでいらいらしていることがバスの添乗員からの報告でわかってきた。そのような日はバスから降り際に騒いだ児童をたたいて降りたり、玄関に入ったあたりで手が出ることもあり、早めにそのような情報を得ることで対処することもできた。

しかし、メガネに関しては近くにいた人に思わず手が出るようで、実習生などにも気をつけるよう伝えたが、何人かたたかれていたことがわかった。

たたくことで、まわりの大人の反応をみていることがあるが、あまり騒がず、注意したり、たたかれた児童から離すよう対処している。

3. まとめと今後の課題

2学期に入り、M児がその日の日課を知ることで見通しをもって学校生活を送れるように「予定黑板」や「予定プリント」を始めた頃から、校内でM児の人をたたく行動は減ってきており、この手だては効果はあつたようである。

振り返って見ると1学期は担任や教室、クラスの仲間も替わったりしてM児にとって大きな環境の変化があり、落ち着かない状況が続き、たたくなどの行動が目立ったのではないかと考えられる。一生懸命に話そうとしてもうまく伝わらなかつたり、3月までしてもよかつたことが4月からできなかつたりと、もどかしい時期があつたことであろう。

問題行動を記録用紙に毎日つけることで、その要因について研究グループの教師や小学部の教師で話し合うことができ、その中で共通理解が得られた。そして教師側もM児の行動を予測し、その対応も共通したものができたことは有効であつたようである。

今後はさらにM児にとってよりわかりやすい環境作りや適切なコミュニケーション手段を広げていくことを考え、またM児にとって関心をもって取り組めるような活動を授業などで取り上げるよう努めていきたい。

参考文献

- ・藤原義博(2001)：講座自閉症「行動問題の理解と包括的な支援～行動問題の基本的なとらえ方・考え方～」月刊実践障害児教育 vol. 334(学研)
- ・藤原義博(2001)：講座自閉症「行動問題の理解と包括的な支援～行動問題への効果的な支援方法の立案～機能的アセスメント」月刊実践障害児教育 vol. 340(学研)
- ・志賀利一(2000)：「発達障害者の問題行動～その理解と対応マニュアル～」

(エンパワメント研究所)